

PART 1

私とキング 私のキング

ホラーというジャンルを超え、
キングの作品は多くの創造者たちを刺激し続ける。
彼らは、キングの何を血肉として、自分の世界を紡ぎあげていくのか？

世界を壊し、 創造し続ける小説家

浦沢直樹 (漫画家)

漫画界随一のキング通で知られる浦沢直樹。
キング同様、世界中に読者を持つストーリーテラーである
浦沢は、キング作品とどのように出会い、
どんなところに魅力を感じ、どのように影響されたのか——。
これまでの作家生活を振り返りながら語ってくれた。



クージョと名付けられた犬を愛するキング。©Alamy Stock Photo/amanaimages

そんなこんなで僕自身も一九八二年に小学館の新人コミック大賞に入選しまして、漫画家の道を歩み出したのですが、デビュー当時、自作だけでは食つていけないので、ある漫画家さんのアシスタントをやっていました。八三年のことですね。その仕事への通勤電車のなかで読む本を探すべく、地元の駅前書店に入つたんです。いろいろ探すなかで、セントバーナードのドアップの表紙カバー、「犬が襲う！」みたいな帯コピーがふと目にとまり、なんだこれはと手に取つたのがキングの『クージョ』です。それが小説作品では最初なんですよ。

大友克洋との同時代性

まさかとは思つたんですが、裏表紙のあらすじを読んでもやはりセントバーナードが人を襲う話らしい。そんな設定で恐怖小説になるのかと思いながら、アシスタント仲間と「セントバーナードが怖いらしいんだよ、これ」「なんですか、それ」といった会話を交わしたのを覚えていいます。で、これが読み進めていくとべらぼうに怖く、そしてとても面白い。

これはすごいぞと周りの人たちにも薦めつつ、キングのほかの作品も読もうと思つたら、その

キングとの出会いは一七歳のときに『キャリー』（一九七七年）を、二〇歳で『シャイニング』（一九八〇年）をロードショウで観たとき。うつすらと「スティーヴン・キング」という人が原作を書いているらしい」と頭に残つてはいたんですね。でも実際に小説を手に取ることはありませんでした。